

ルカ 5:1-15 「暗い日、明るい日」

聖句

「イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。イエスは二艘の船が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、船から上がって網を洗っていた。そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。話し終わったとき、シモンに、『沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい』と言われた。シモンは、『先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみしましょう』と答えた。そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網がやぶれそうになった。そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二艘の舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです』と言った。とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。『恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる』　そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った」

人生の中で、暗い日、というものに、わたしたちは直面することがあるでありましょう。自分の歩みの上に、雲がおおいかぶさり、光を見出すことができない、という経験をすることがあるのです。

今日の聖書では、シモンという名の漁師が、まさにこの人生の中の暗い日を経験しておりました。シモンは先祖代々、ゲネサレトの湖、すなわち、ガリラヤの湖で漁師をなりわいとして生活をして来た人でした。この季節、こういう風が吹く日には、湖のこのあたりに、これぐらいの魚が、これだけいる。長年漁師として培った経験が、シモンに熟練したわざと、するどい勘とを与えておりました。

ガリラヤの湖は、ゆたかな魚にあふれ、その恵みによって、シモンは自分と家族とを十分に養うことができました。

しかし、人生の中の暗い日が、おとずれたのです。長年培った経験があるにもかかわらず、するどい勘にこれまで裏切られたことはなかったにもかかわらず、その日には、一匹の魚も得ることができなかったのです。こんなはずではない。こんなはずではない。焦る気持ちを抑えながら、網をまた投げてみる。しかし何もかからない。こんなはずではない。網をまた投げてみる。しかし何もかからない。こんなはずではない。網をまた投げてみる。しかし何もかからない。

日は落ち、夜は更けて闇となり、うす明かりが射して朝が近づき、ついに日がまた昇りました。泥のように疲れ果てた腕で、網をまた投げてみる。しかし、やはり何もかからない。とうとう、シモンは、あきらめることにしたのです。

このような、人生の中の暗い日が、ふいにわたしたちに訪れることがあります。わたしたちの持っている舟。それには何の問題もないにもかかわらず。わたしたちの持っている投げ網。それには何の問題もないにもかかわらず。わたしたちの湖。それには何の問題もないにもかかわらず。わたしたちの腕。それには何の問題もないにもかかわらず。わたしたちの仕事に対する熱意と努力。それには何の問題もないにもかかわらず。そうであるにもかかわらず、わたしたちの期待がすべて裏切られ、わたしたちの労苦がすべて徒労に終わってしまうような、そのような暗い日が、わたしたちにも訪れることがあるのです。

シモンは、みじめな気持ちで岸に戻って来ました。それを見かけた主イエスキリストは、舟を貸してくれ、と声をおかけになりました。主イエスキリストの話を聞くために、山のような群衆が、ガリラヤ湖の岸辺を埋め尽くしていました。群衆に押しつぶされてしまわないために、岸から少し舟を漕ぎ出し、主イエスキリストは舟の上に腰かけて、湖の上から岸辺の群衆にむかって、話をなさいました。

主イエスキリストは、福音を語られました。それは、神の国の福音であります。

それは、希望と慰めをもたらす福音です。群衆は福音を聞いて、喜びで顔を輝かせたであらうでしょう。しかし、主イエスキリストの足もとで、その舟の上で、ただひとりシモンは、疲れ切った暗い顔で、うずくまっていたのです。主イエスキリストは、シモンの様子を見て、すべてを理解されました。

わたしたちも、人生の暗い日に、主イエスキリストの福音を聞くのですが、しかしなお、心が晴れず、気持ちは沈んだまま、ということがあるでしょう。シモンがそうでありました。そのシモンをじっと主イエスは見つめておられました。主イエスはまた、わたしたちにも目を注いで、わたしたちの沈んだ気持ちを理解してくださるのです。

主イエスキリストは、シモンを招かれました。「シモン、沖に漕ぎ出して、もう一度網を投げてごらん」

すべてがうまくいかずに、すべてをあきらめる気持ちになっていたシモンに、主イエスは、「もう一度やってみよう」と言われたのです。

すべてをあきらめたシモンにとって、今や、舟はたよりにならないものとなっていました。すべてをあきらめたシモンにとって、今や、網もたよりにならないものとなっていました。すべてをあきらめたシモンにとって、今や、腕と勘もたよりにならないものとなっていました。

ただ「もう一度やってみよう」と言われた主イエスのお言葉だけが、シモンにとって唯一、たよるよすがでありました。

わたしたちも、人生の暗い日においては、すべてのことがたよりにならず、ただ、主イエスのお言葉だけが、たよるよすがだ。そのような瞬間に立ち至ることがあります。次の瞬間、シモンは奇跡を体験していました。人生の暗い日が、明るい日に変わった瞬間です。

「漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網がやぶれそうになった。そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してく

れるように頼んだ。彼らは来て、二艘の舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった」(ルカ 5:6-8)

人生の暗い日が、主イエスの言葉にお従いすることを通して、明るい日になる。この体験に心を打たれたシモンは、回心して、主イエスキリストの弟子となりました。

人生の暗い日が、主イエスによって、明るい日に変えられる。この経験を、わたしたちみんなが切実に必要として居ります。人生の暗い日が、主イエスによって、明るい日に変えられる。この経験を、多くの人に分ち与えるために、シモンは「人間をとる漁師」とされたのでありました。主イエスの弟子となったシモンは、ペトロという新しい名前を主イエスから授けられました。

このシモン・ペトロは、しかし、人生のさらに暗い日を通らなければならなかったのです。

主イエスキリストが捕らえられ、裁判にかけられ、鞭打たれた日。シモン・ペトロは三度、「わたしはイエスなど知らない」と言って、主イエスを裏切ってしまったのです。その直前までペトロは、「先生、わたしはたと死んでも、最後まであなたについていきます」と誓っていたのでした。

主イエスを裏切ってしまった日。それが、ペトロにとって、人生のさらに暗い日でありました。かつては漁師としての自分の腕に失望したペトロでありましたが、いまペトロは、人間としての自分自身に絶望させられているのです。その直後、主イエスはゴルゴダの丘で十字架につけられ、息を引き取られました。主イエスが息を引き取った瞬間。それは、ペトロの絶望が、永遠の絶望となった瞬間でありました。

これほど暗い日が、あるのでしょうか。これほど闇に包まれた瞬間があるのでしょうか。永遠の絶望と言うべき絶望を味あわねばならない日が来ることを、わたしたちは心から恐れます。

しかし、これほど暗い日が、三日目に、明るい日と変えられたのです。

「こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。彼らは恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った。そこで、イエスは言われた。『なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおおり、わたしにはそれがある』 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、『ここに何か食べ物があるか』と言われた。そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた」(ルカ 24:36-43)

永遠の絶望と言うべき絶望が、永遠の希望と言うべき希望に変えられた瞬間です。このあと主イエスは、ペトロの裏切りの罪をまったくお赦しになり、「ペトロよ、わたしの羊を飼いなさい」とおっしゃって、主イエスキリストの教会を、ペトロにお委ねになったのでした。

人生の最も暗い日が、主イエスによって、明るい日に変えられる。このことを身をもって体験したペトロこそ、主イエスキリストの教会を委ねられるのにふさわしい人物でありました。

その後ペトロは、使徒として地中海世界の各地で主イエスキリストの福音を語り伝えました。迫害され、牢獄に捕らえられ、鞭打たれることがしばしばありました。いぜんとして、人生の暗い日が、ペトロのもとを訪れ続けたのです。しかし、ペトロはもう二度と、絶望する、ということがありませんでした。主イエスキリストの復活を通して、ペトロは生き生きとした希望に生きるように変えられていたからです。

どうかわたしたちも、この生き生きとした希望に、与ることができますように。

祈りましょう。

祈り

天の父なる神様。わたしたちは、人生の暗い日を全く思いがけず迎えることがあります。どうかそのようなとき、自暴自棄に陥ることがありませんように。望みを捨ててしまうことがありませんように。たとい、すべての望みを捨てなければならぬように思われる、人生の最も暗い瞬間においても、どうか、主イエスキリストに、わたしたちの望みを置くことができますように。まことに主イエスキリストは、わたしたちの人生の暗い日を、明るい日に変えることのできるお方であります。主イエスは、十字架にかかり、三日目に復活して、わたしたちの永遠の絶望と言うべき絶望を、すべて、永遠の希望と言うべき希望に変えてくださいました。実に主イエスが死からよみがえりたもうたゆえに、わたしたちは今、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信じます。どうかこの生き生きとした希望によって、わたしたちはこれからの日々を生きることができますように。わたしたちの人生のすべての日々を、お導きください。わたしたちの主イエスキリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。